

國學院大學學術情報リポジトリ

問題提起 1

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋元, 秀一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001107

《問題提起1》

橋 元 秀 一

【橋元】林先生ありがとうございます。今、林先生が重要な論点をまとめて提示してくださいましたとおり、歴史学、民俗学、宗教社会学の観点から重要な指摘があり、いろいろなことを私も学ばせていただきました。しかし、時間の制約を考えると、多くの論点を議論することは難しいでしょう。この二〇年近い渋谷学の研究の中で、私自身も一緒に学ばせてもらいながら、今回こうしたコメントをする機会をいただきましたので、研究会の皆さんの成果をできるだけ多くの方々と共有できるように問題点を提起したく、論点をいくつかに絞りました。

論点① 「渋谷」の変貌とその推移をどう理解するのか

まず、渋谷の区全体に広がるエリアのお話ではなく、渋谷駅周辺のいわゆる「渋谷の街」の問題について、その形成と変貌に限って問題提起をさせていただきます。

最初の問題提起は、渋谷の変貌をどのように理解するのかということです。第一部で三人の先生方は、渋谷が変貌してきたこと、あるいは変貌しつつあることをそれぞれの観点からお話されていました。そこでいう変貌とはいったいどういう変貌を指すのか。さらなる変貌があるとすれば、現在と今後をどう見ればいいのか。私は、変貌の大きな流れとしては、渋谷のまちがつくられる過程でいろいろなものが集まって、いわば雑多性としかいいいようなない、いろいろなものにぎわいが形成され、それが「若者の街」、さらには今日の「若者も大人も楽しむ街」へと変貌する方向で動いていると考えています。

渋谷学としては、実はこうした時期区分や、渋谷らしさの特徴づけも含めて、必ずしも十分に議論されていません。その参考といえますか、口火を切る話として、これまでの研究における私の「渋谷エコノミー」（橋元秀一「統計データからみた「渋谷らしさ」の変質と課題」國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会・田原裕子編著『渋谷学叢書4 渋谷らしさの構築』雄山閣、二〇一五〔平成二七〕年）等を通じた分析を含めた仮説的整理をもって、渋谷の特徴を次のような時系列でお示しいたいと思います。

幕末〜一九六〇年代 雑多性の渋谷

渋谷は、江戸のはずれにあった小さな村でしたが、第二次世界大戦後の高度経済成長を経て、一九六〇年代には副都心といわれる都市を形成しました。このプロセスは、全国至るところで地域がそれぞれの事情の中で特徴を持ちながら発展してきたのと同様に、渋谷エリアもいろいろな環境変化の中で様々な人々が流入して、渋谷駅周辺には雑多性としかしいような多種多様なにぎわいが形成されてきました。ただそれは、東京を代表したり、あるいは「渋谷だ」という際立った渋谷らしさがあったりしたわけでは必ずしもないのです。一九六〇年代までの渋谷は、そういう段階にあったと思います。

一九七〇年代・八〇年代 「若者の街 渋谷①」（若者文化の情報発信基地）

都市形成の長い期間を経て、まさに渋谷が「渋谷」と呼ばれていくのは、一九七〇年代・八〇年代に「若者の街」として特別な存在となったからではないでしょうか。そこに渋谷PARCO（一九七三〔昭和四八〕年開業）、SHIBUYA109（一九七九〔昭和五四〕年開業）、小劇場渋谷ジャン・ジャン（一九六九〔昭和四四〕年開業）

二〇〇〇〔平成一二〕年閉業）や公園通りのにぎわいが展開されることで、特別な存在としての「渋谷」が形成され、まさに音楽、演劇、ファッション等の若者文化の情報発信基地になったと思います。

一九九〇年代・二〇〇〇年代 「若者の街 渋谷②」（若者ファッションの情報発信舞台）

次に、一九九〇年代から二〇〇〇年代になると、「若者の街」は、コギャルやガングロに象徴される女子高校生の聖地になり、その過程で駅周辺の商業地では衣料品店や飲食店などの全国チェーンの法人店が増えて、反対に個人店が非常に減っていくという事態が起こります。経済産業省の『商業統計調査』によれば、渋谷の小売業を営む個人店は一九八八（昭和六三）年には一七六四店ありましたが、二〇〇七（平成一九）年には七五四店と、六割近くが消滅しました（前掲「統計データからみた「渋谷らしさ」の変質と課題」）。しかし、「若者の街」は、むしろ来訪者が増えながらも大きく変質していきます。一九八〇年代半ばまでは衣服関連製造業などの隆盛を含む若者ファッションの「情報発信基地」だったのが、さらに多くのファッション関連小売業の集積が進み、一九九〇年代以降にはファッションの情報と販売の場ではあるものの、それらを生み出す創造的な機能を持たない「情報発信舞台」となっていました。これが「若者の街」のパート2になったのだらうと思います。それと同時に、二〇〇〇（平成一二）年四月に「オトナ発信地」をコンセプトとする渋谷マークシティが開店して、「大人の街」づくりも進行し始めていくわけです。

二〇一〇年代以降 「大人の街」づくり（多様性の情報発信舞台）

そして、二〇一〇年代に渋谷の再開発が本格的に始まると、「大人の街」づくりが進行していく中で、行政の取り組みも多様性を重視した情報発信舞台としての利用へと変貌していきます。こうした流れの中に今日の渋谷があると

思います。しかし、それは同時に新年のカウントダウンや、ハロウィンの祭りに象徴されるような「若者の街」へまします若者が集まってくるのと同時並行で進んでいます。再開発が進む中で、①そうした流れが合流して「若者も大人も集まる街」へ変貌していくのかどうか。また、②今後どのように「渋谷らしさ」が変貌し、どのような多様性を持つのか。そして、③以上のような基本的な渋谷のまちの変遷と、今後の見通しをどのように理解するのか。この三点をそれぞれの分野からの見解を含めて議論をして、渋谷学研究会としての共通認識の形成ができればと思います。

論点② 渋谷学は何を目指すのか

二つ目の問題提起は、論点①の延長線上にはなりますが、渋谷学はいったい何を指すのかということ。とりわけ、今、進捗しつつある渋谷再開発の中で、渋谷はいかなる変化をしようとしているのか。また、そこにはどのような課題があるのか。これまでの研究成果を踏まえて問題提起をすることが研究会の大きな役目であろうし、上山先生が基調講演でおっしゃっていた、「渋谷学はいかなる意味で〈学〉たり得るのか」ということへの答えにもなっていくのかなと思います。

以上の二つの問題提起を踏まえて、議論していただければと思います。以上です。

【林】橋元先生、重要な問題提起をしていただきありがとうございました。続きまして、青山学院大学総合文化政策学部客員教授の伊藤毅先生に、報告に対する問題提起の要点と質問内容についてお話をいただきたいと思います。